

日本通訳学会第1回大会 記念講演

「二カ国語の間（はざま）」

西山千

日本翻訳家協会理事長・同時通訳者

以下は、2000年9月23日、文京区シビックホールにて開催された日本通訳学会第1回大会における西山千氏の記念講演の内容を、編集部で責任で要約したものです。本誌への掲載に際してご快諾をいただいた西山氏に感謝します。

西山でございます。ただいま、ご紹介をいただきましたが、自己紹介においても言語による社会的習慣の違いがいろいろ現れます。翻訳でも通訳でもそれが大きな課題になっていますし、論議のテーマにもなっています。今、鳥飼先生から、私が「国際コミュニケーター」という肩書きを使っていたときもあったというお話がありました。米国大使館に勤めていたころ、いろいろ講演などを頼まれて、勤務外の時間におしゃべりをしており、その時に「肩書きは何ですか？」と聞かれるのですが、アメリカ大使館顧問と言うとアメリカ大使館を代表してしゃべっているように誤解されます。仕方なしに「国際コミュニケーター」なんてどうだろうという、同僚もそれでいいだろうというので、そういう変な肩書きを持ったわけです。今はまったく関係がありませんのでお忘れになって下さい。

これから日本の戦後における通訳の歴史もお話ししますが、通訳は大昔の紀元前何世紀という頃からはじまったものですので、私の話はごく近年の歴史ということになります。ご紹介にもありましたが、1945年の敗戦後進駐軍が日本に来たときに、私が研究所でやっていた電気工学関係の研究テーマが調査の対象になりました。そのときに日本人の技師の方が戦時中の研究を説明しようとしたのですがうまくできない。そこで私が呼び出されて通訳しました。すると進駐軍の空軍大

NISHIYAMA Sen, "Between Two Languages."

Interpretation Studies (Special Issue), December 2000, pages 12-18.

© 2000 by the Japan Association for Interpretation Studies.

佐が、日本人の技師の方が退席したあと私だけ残しました。私はそこで働かなければいけなくなりました。それで終戦直後からずっと米軍とつきあいはじまりました。

一時官庁を休職させてもらいましたが、一ヶ月が三ヶ月になり、結局 5 年間になりました。この期間が私の通訳術訓練の場になってしまいました。はじめは英日の逐次通訳をやっていたのですが、当時、終戦直後で日本の経済を立て直すために、皆さん忙しく働いている人ばかりでした。その人々が進駐軍と打ち合わせをするときにその会議の通訳を頼まれました。そのときアメリカ人の係官一人に対して日本側は 5-6 人の方がいました。日本語の話を英語で逐次通訳するのですが、その間、多忙な人たちを待たせておくのは時間の無駄ではないかと感じました。私をはじめはものすごい早口の逐次通訳をして時間を短縮しようとしたのですが、日本側から早口すぎてわからないと言われてしまいました。それでも何とかして時間を短くすることはできないかと考えていました。早口で逐次通訳していると、心理的にある種の衝動に駆られます。ある文の初めの部分の意味が分かると、すぐ英語に通訳しようという衝動に駆られたのです。そこで、日本語を聞きながら係官に小さい声で英語に通訳しますと、残りの日本語が聞こえてきます。言うまでもありませんが、日本語の意味のカギとなる言葉は動詞で、それが文末に来ます。その前の部分までとにかく英語でしゃべります。そして最後に「というわけでない」と否定がくれば、英語では仕方ないので **According to some people, this is not true.** とうち消す。そういうことをしているうちに半センテンスぐらい遅れて同時通訳ができるようになってしまいました。それは大体 1951 年から 52 年頃でした。ですから 1951 年頃に私は同時通訳をするようになったわけです。1952 年に平和条約が発効し、私の勤めていた進駐軍の外交部がアメリカ大使館になり、大使館から勤務を頼まれました。電子工学研究所に籍はあったのですが、5 年間離れていたのが自分が役に立たないことはわかっていました。籍は一応あって、もとの仕事に戻れば給料はもらえたのですが、これはよくないと思い、そこを辞めて大使館に勤めるようになりました。大使館では顧問という肩書きをいただいて、広報関係や日本の世論の動向などについての説明をするのが本来の仕事でした。ところが、大使がお話をするとか、アメリカから日本にお偉方が来た場合に、通訳の必要があるときにはいつも引っぱり出されるようになりました。そのときに、日本人が話すことは大使に小さい声で英語に同時通訳しました。大使の話を日本側に伝えるときはメモをとって逐次通訳をしていました。ただ、それまでに同時通訳ができるようになっていましたので、大使館の中では「西山は同時通訳もできる」ということになっていました。少し前に戻りますが、終戦直後、国際連合が作られたころ、国連の同時通訳はあまりに珍しいのでアメリカの新聞のニ

ユースになっていました。米軍側の方では、国連で同時通訳ができるなら日本語でもできるのではないかと言いはじめましたが、私はそれは絶対不可能だ、日本語と英語とでは語順が正反対だからダメだと主張しました。当時の他の通訳者たちも異口同音にそう言っていました。皆さんニュース映画などでごらんになったと思いますが、東京裁判ではヘッドフォンをつけていて、あたかも同時通訳をしているように見えたが、実は文章がすでにできていて、その翻訳もちゃんとできていて、それをただ同時朗読していたんです。あとのところは全部逐次の通訳でした。あの当時は、一般には日本語と英語の間の同時通訳は不可能と思われていたわけです。

1957年頃に、日本生産性本部がアメリカに日本の産業界の代表団を派遣することになりました。その人々がアメリカのいろいろな工場を見学するときに通訳者が必要でした。その通訳者を養成するために、アメリカの国務省で通訳の訓練を始めました。皆さんの先輩の中にもその訓練を受けた方がいらっしゃいます。この席にもいらっしゃるとお思います。そのとき、国務省で通訳訓練を行う際、同時通訳を日英でやれと言われると、皆さん語順が違うからダメだと反対したそうです。そうすると、西山ができるんだからできないはずはないと言われたんだそうです。それで私は恨まれるようになってしまいました。そのとき同時通訳ができるようになった方々が日本の通訳者の草分けとなりました。その方々は今日の国際会議通訳者の先輩であると同時に、実際の地盤を作られた方々です。私じゃないです。このようにして日本の通訳界の基礎ができあがったわけです。これが一応の歴史です。

私自身が経験の中で得た教訓はいろいろありますが、そのひとつはジョン・グレン氏—この前、70歳台の宇宙飛行士として宇宙飛行をされた方ですが、この方はアメリカ人として地球を回る宇宙船に初めて搭乗した方です。そのグレン氏の来日時に通訳をすることになりました。そのとき、今でも覚えています、東京會館で日本の学術会議の皆さんの前でグレン氏の講演を逐次通訳しました。質疑応答の時間になると、ある日本の科学者が「飛行中に「うちゅうじん」を見ることができましたか」という質問をしました。私はきょとんとしてしまいましたが、質問された方は真面目な顔をしています。それで私はちゅうちょしながらグレンさんの方を向いて、**While you are in orbit, did you happen to see any spacemen?** と訊きました。グレンさんは **Spacemen?** と言うんです。その瞬間、私はハッと気づきまして、**No, no, no, I didn't mean spacemen, I mean *space dust*.** と言いました。「うちゅうじん」の「じん」は「塵」だったんです。（笑）英語の分かる学者の方々もいらっしゃって、私の間違いがよく分かりましたので、みんなドー

ッと笑いました。その後も技術者のOB会の集まりなどではいまだに笑いのタネにされています。通訳をするということはよほど注意しないと笑われるが、感謝されることはあまりないんです。私にとってこれはいい訓練でした。

アポロの宇宙飛行については7号から17号までNHKで4年間通訳しました。最初はブースでモニターを見ながら通訳しました。そのとき、視聴者から苦情が出ました。私の通訳した声は番組の出演者の耳にだけ聞こえていて、今こういふことを言っている、と解説するのは出演者だったわけです。2回目ぐらいのときに私がスタジオに行きますと「西山さん、あなたの声を電波に出しますよ」と言うんです。「大丈夫ですか」と言うと「いや視聴者は直接飛行士の言葉を聞きたいんだ」ということでした。アポロ7号の放送は2~3回だけでしたが、数ヶ月後のアポロ8号は月の周りを回りました。その時もNHKのスタジオではブースから同時通訳をしていました。ところが2回目に行くとブースがないんです。「私の席はどこですか」と言うと「ここです」と言う。スタジオの中なんですね。でん、と机があって、その私のいる机をテレビカメラが睨んでいます。「実はあなたの顔を出そうと思います」と言うので私は「ちょっと待って下さい。私は一所懸命集中しているんですからしかめ面をしてるんです。そんな顔をテレビに出されたら困りますよ」と言いました。すると、「いや西山さん、実は視聴者から問い合わせがあって、同時通訳をする機械装置はどんなものか、と言うんですよ」(笑)。だから、機械じゃなくて生の人間だということを見せなきゃいけない。それで、私の顔が出るようになったのです。

その年の12月に有名な三億円事件が起きました。東芝の工場にボーナスを運ぶために、アルミケースに入れた三億円の現金を車で銀行から輸送していましたが、その途中で交通警察に変装した犯人に奪われるという事件でした。犯人はまだ捕まっていません。もちろん、もう時効になりました。当時、似顔絵が駅やデパートなど街のあちこちに貼り出されました。私が年末の買い物のためにデパートに行くと、買い物客が自分を指さしてこそこそ話しているんです。もちろん、あれは同時通訳している人だよ、と言ってるんでしょうけれども、私にとっては「あいつだよ、似顔絵の男は」と言われているような気がして、恐怖心を持ちました。そういう、通訳者としてのいろいろな経験がありました。

4年間、アポロの同時通訳をやりましたが、当時は暑い照明だったので、汗をびっしょりかきながら一所懸命通訳するのは大変な労力でした。アポロが終わってしばらくして、大使館の勤務を終えてバスに乗って帰宅しようとしていたとき、向かいの席の老婦人がジロジロを私を見ているんです。ネクタイでも曲がってい

るのかなと気になりました。バスがすいてくるとその老婦人が立ち上がり、吊革につかまって、私に「失礼ですけど、NHK で同時通訳をされたのはあなたさまですか？」と尋ねてきました。「はい、そうでございます」と答えると、そのご婦人は深々と頭をさげて、「どうもありがとうございます。私の生涯の間にまさか月に人が立つのをこの目で見られるとは夢にも思いませんでした。あなたさまのおかげでよくわかりました」とお礼を言われました。私はあまりにもびっくりしてしまったために「は、ははあ…」というぐらいで、ろくに返事もできませんでした。そのお礼を言って下さったすばらしい令夫人のおかげで、あの 4 年間の通訳者としての労力が全部報われたという気になれました。通訳者冥利というのはそういうものではないかと思えます。通訳者は時々そういう幸運に恵まれます。「よくやってくれた、ありがとう」という言葉は大変ありがたいんです。

その後も私は沢山の教訓を得ましたが、ひとつ皆さんに是非一般社会に普及してほしいことがあります。日本語で「なにかを行う人」には、たとえば「翻訳家」や「運転手」などと、ちゃんともうひとつ名詞がついています。ところが「通訳」は動詞にも名詞にも使われます。「おい、通訳を呼んでこい」と言われます。いまだにテレビなどでも「通訳をつけて」などと言っています。あれはけしからんと思えます。日本語を知らない、と大声で言いたいんです。なぜかといいますと、医者に行くとき「医」に診てもらいに行くとは言わないでしょう？ 運転手に道を教えるときに「運転」に道を教えるとは言わないでしょう？ 運転「手」と、ちゃんと名詞がつくわけですよ。通訳をする人を「通訳」という動詞で呼び捨てにするのは、はなはだけしからんと思う。通訳する人を「通訳者」と言うことは、私は非常に大切であると思えます。そのことを皆さんにおおいに普及してもらいたい。

また、もうひとつ私が通訳を通して学んだことは、通訳をしているうちにだんだんと話し手の心持ちになってくるということです。自分が話し手になってしまったような、錯覚じゃないですけども、そんな気持ちになってしまうんですね。そういうふうにならないと話し手が言いたいことを本当に伝えるのは難しい。ずっと昔の話ですが、英国に行ったとき、ロンドンの港湾労働者と日本人の間で通訳をしました。その労働者は労働党員で、階級闘争に凝り固まった人でした。その人が東ロンドンのコックニーのイングリッシュでまくし立てました。すると私もその港湾労働者になってしまったような気になって、おんなじように日本語でアジ演説をした覚えがあります。あとで、「さてよ、自分は話し手の気持ちになるというより、話し手そのものになっているじゃないか」と思いました。ですから、話し手そのものになることはもちろん不可能ですが、できるだけ話し手の心

持ちになってしまうことで、はじめてよい通訳ができるのではないかと思います。最後に、バイリンガルの「罪」についてひとこと。それは「うっかり病」です。「どんなことでも両国語で言える」と思いこんでしまうことです。それは、私はとんでもない自惚れだと思えます。ところがそれに陥ってしまうことがあります。ある時、日本人一行とともに通訳者としてアメリカに行きました。シカゴで、シカゴの市長さんが歓迎昼食会を開いてくれました。そのとき市長さんは、リンカーンがこの地から政界に出馬したことが誇りであると話しました。そのほか、民主主義の話などもして、それを私は日本語に逐次通訳していました。そして日本側の代表が「私たちも小学生のとき、林間学校で（笑）先生からリンカーンの話を聞きました」と言ったのを通訳するとき *We also as pupils in elementary school learned about Abraham Lincoln in the Lincoln School.* と言っちゃったんです。（笑）自分ではそう言ったことを覚えていないんですよ。ところが、それをあとである有名な加藤静枝先生に間違いを指摘されました。「西山さん、あなた可愛い間違いをしましたよ」と言われました。当然、*We learned it in summer camp.* と言えばよかったです、つい「うっかり病」にかかってしまいます。ベトナム戦争の当時、アメリカの駐ベトナム大使が日本にきて新聞記者と話をしたときに、B52 爆撃機が北爆をしたという話をされました。私はちゃんと“B52”と聞こえていたのですが、日本語では“B29”と言っちゃってるんです。B29というのは戦争中に我々東京の市民を大いにいじめてくれた有名な爆撃機です。そこで、つい B29 と口から出ちゃうんです。ですから、バイリンガルというのはいいことでしょうけれども、バイリンガルの「うっかり病」にかかってはいけません。ご参考になる話がありましたかどうかわかりませんが、残りの時間でご質問をいただきたいと思えます。（拍手）

（質疑応答要旨）

質問：日本で同時通訳が普及し始めたのはいつ頃からでしょうか。

西山：1960年代半ばごろ、経済閣僚会議あたりからだと思えます。でも最初の頃の経済閣僚会議は逐次通訳でした。同時通訳は1960年ぐらいからだんだんと普及するようになりました。

小松：（経済閣僚会議の）二回目あたりで村松さんがすでに同時でやっていました。

質問：日本式紹介で「いまご紹介にあずかりました…です」をどう訳すかという点についてですが、相手側の言語の慣用に合わせて、それを訳さない方法もあるでしょうが、名前を確認する意味で訳す、あるいは日本の習慣や文化を伝え

るために訳すという考え方もあると思います。

西山：いろいろな考え方があると思います。日本ではそう言うんだというやり方もあるでしょう。アメリカ大使館にいた 10 ヶ国語を流暢に話す翻訳者が、日本語の新聞記事を毎日英語に訳して配布していました。彼の翻訳は日本語の文章の通りに英語にしてありましたが、英語としてやや不自然なこともありました。しかし彼は、これは日本の新聞であってアメリカの新聞ではないんだ、日本語の新聞から日本人読者がどういう順序でどういう意味合いで情報を読みとっているかを、これによって知ることができるんだと言うのです。それで、ご質問と同じような意見を言っていました。時と場合、場所、国、目的によって対応は違ってくると思います。少なくとも 8 割から 9 割の情報を正しく伝達するためには、相手国の社会習慣に基づいて、相手国の言葉に一致するような情報を表現した方がよろしいと個人的には思います。

質問：肩書きとして「国際コミュニケーター」は使っていないと言われましたが、異文化間の伝達ということを考えると、単に通訳者というよりコミュニケーターという言い方も良いと思うのですが。

西山：コミュニケーターといっても、どの人間でもコミュニケーターなんですから、結局、それでは「人間のひとり」ということになってしまいますね。その意味で国際コミュニケーターというのは実に変な肩書きだったと思います。社会の習慣に合わせるという話では、ドナルド・キーンさんから日本の小説を翻訳するときの話聞いたことがあります。ある小説の中で、和服の女性が午後ある場所を訪問するのにわざわざ真新しい足袋を履いた、という表現があったそうです。キーンさんはそれを翻訳するときに考えたそうです。「真新しい足袋」というのを英語で **tabi** にして、これこれのものと解説したのですが、キーンさんは二晩、三晩寝られなかったと言います。北海道かどこかの高校の英語の先生が、キーンさんは「足袋」と「手袋」を間違っていると思っているんじゃないかと心配でたまらなかったということでした。まさしくそれは文化の翻訳です。翻訳の目的によって違うと思います。技術翻訳なら単語の定義も国際的に決まっていますから間違いがないわけです。ところが文学や論文などを別の国の言葉にする場合には、翻訳者であろうと通訳者であろうと、文化と合わせる必要があると思います。

なお、大会後の理事会において、学会規約第 8 条 6 項の規定に基づき、西山氏を日本通訳学会の名誉会員（特別顧問）として推挙することが決定されました。